

第8章 小野川水系における旧石器文化

重松 佳久

はじめに

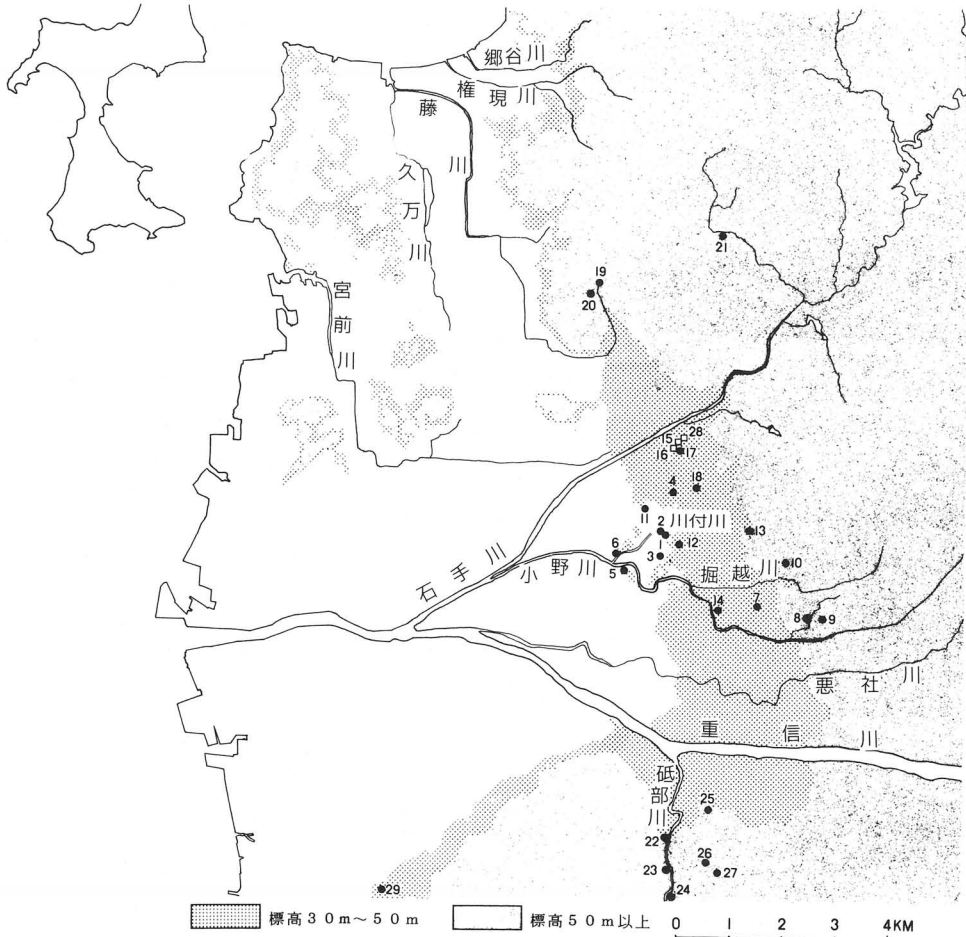
松山平野において、現存する水系軸の多くは、後世の河川改修や扇状地形形成過程により流路変更が余儀なくされ旧石器時代の流路復元を遺物分布や現地地形に置き換え想定する事は、多くの問題を内蔵している。しかしながら、火山灰研究の進展・地質・地理学からのアプローチを受けて古環境の復元作業とともに考古学的視点からもおのずと松山平野を貫流する各水系軸に対する社会的基盤認識作業の必要性が問われる事となっている。こうした中で抽出される水系軸の不変性の論議を前提とした蓄積作業が不可欠と考えるが、あえてここでは、不勉強のため現小野川筋に位置し比較的遺物検出がなされている中流域を総轄して小野川水系と仮称し旧石器時代遺物の概観にふれることとしたい。

1. 遺跡立地

近年、小野川流域の旧石器時代遺物が検出されている背景として、国道11号線の路線変更整備とあいまって急速に宅地化がすすむとともに小野川右岸河岸段丘上に広がる史跡来住廃寺跡周辺の関連遺構群の確認作業の中で縄文晩期から続く遺跡群の存在が検出されることとなった。これらの遺跡群の調査が進展すると同時に微高地・低位段丘において旧石器時代の遺物が散発的に検出されている。また、同水系における独立丘陵・山塊から延びる舌状台地端部等の高位段丘上においても古墳群の造成埋土及び貯水池の堰堤において地元収集家等の手により資料蓄積がなされている。従来、当地域の旧石器時代の遺跡分布から後者の独立丘陵・舌状台地など山塊縁部に集中するとされた遺跡立地は、様相を異とし微高地・低位段丘・埋没丘陵を含めた海拔約30M～50Mの平坦地位置（第38図）に中心的な立地の成立を見ることとし、遺跡立地の選択に際し立地環境を含めた意図的な相違を持つことが窺い知れる。また、現在までに検出されている愛媛県内の旧石器時代遺跡の分布は、島諸部を除けば松山平野中央を縦断する小野川水系にその集中を見ることができ、こうした状況は、旧石器文化研究不在の当地においても中流域における発掘調査密度の高さや洪積台地の残存度のみ比例するだけともいいがたいものと考えられる。水系軸の中で残される遺跡群の立地に係わる選択は、ワークエリア内の活動拠点としての空間の占有を前提としているとともに安定した生活維持基盤の保証の上に成り立つものであり、そうした人類を取り囲む環境的保証を持つ立地の理解にあってはじめて意図された人類の痕跡を理解しうるものと考えられる。

さらに、標高約30M～50Mの平坦地遺跡の土層観察から、旧石器時代遺物の検出される立地条件として段丘礫層（時期不明）上位に被覆する黄色シルト層が比較的遺存する地域において後世の攪乱と同時に確認されていることが報告されており、黄色シルト層等関連層成因・年代の科学的な検討を要している。今後、遺物出土に係わる基本層位の認識もふまえ、現

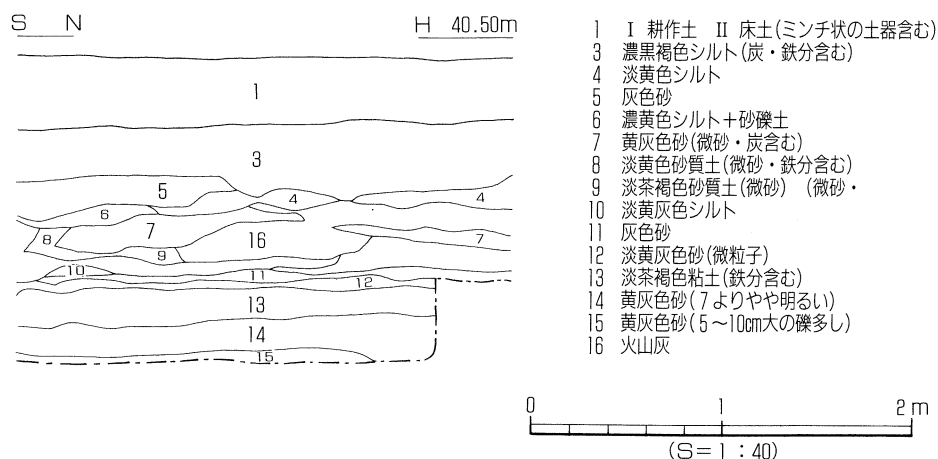
小野川水系における旧石器文化



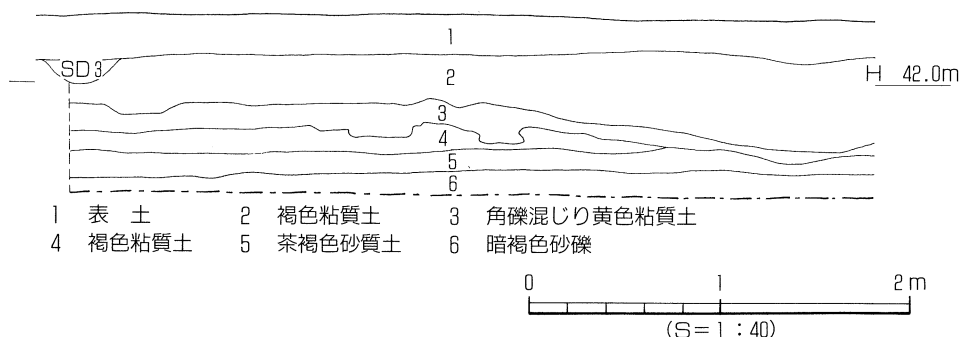
第38図 松山平野の旧石器時代遺跡

番号	遺跡名	水系	標高	立地環境	遺物・調査内容及び遺構
1	筋違遺跡 H区	小野川右岸	28.5m	平地 地	第40図2
2	筋違遺跡 F区	小野川右岸	28.5m	平地 地	第40図1
3	星間谷立遺跡 二次調査区	小野川右岸	24.3m	平地 地	第40図4
4	桑原田中遺跡	小野川右岸 右手川左岸	33.0m	平地 地	第42図12
5	東山麓ヶ水遺跡	小野川左岸	43.0m	山頂	第40図3
6	天山王ヶ水遺跡	小野川右岸	30.0m	山頂	第41図9
7	久米小学校遺跡 二次調査区	小野川右岸	約44.0m	平地 地	第40図5
8	久米窪田遺跡 N区	小野川右岸	49.0m	平地 地	第41図6
9	久米窪田遺跡 V区	小野川右岸	50.0m	平地 地	第42図10・11
10	五郎谷遺跡	小野川右岸	73.0m	山頂	第41図7・8
11	釜ノ口遺跡 一次調査区	小野川右岸	28.0m	平地 地	有舌尖頭器
12	福宮寺小学校構内遺跡	小野川右岸	約30.0m	平地 地	楔形石核・彫片
13	久米山田遺跡	小野川右岸	87.0m	山頂斜面	ナイフ形石器
14	久米源郷遺跡 五次調査区	小野川右岸	35.0m	平地 地	楔形石核・彫片
15	榑原西谷遺跡	右手川左岸	39.5m	平地 地	AT火山灰
16	西郷東遺跡 一次調査区	右手川左岸	38.0m	平地 地	AT火山灰
17	西郷東遺跡 二次調査区	右手川左岸	38.0m	平地 地	角錐状石器
18	榑石山占領遺跡 一次調査	右手川左岸	39.6m	平地 地	楔形石核・彫片
19	榑石山占領遺跡	右手川右岸	90.0m	斜面	楔形石核・彫片
20	榑石山占領遺跡	右手川右岸	60.0m	斜面	楔形石核・彫片
21	伊予郷遺跡	右手川右岸	140~ 150m	斜面	榑石山占領遺跡 一次調査
22	長田遺跡	砥部川左岸	50.0m	斜面	楔形石核・彫片 台形縁石器
23	塚ノ向遺跡	砥部川右岸	50.0m	斜面	楔形石核・彫片 スクレイパー・尖頭器
24	宮内大徳遺跡	砥部川右岸	58.0m	平地 地	細石核・楔形石核・彫片
25	土間原遺跡 N区	砥部川左岸	60.0m	平地 地	ナイフ形石器
26	谷田遺跡	砥部川右岸	75.0m	斜面	楔形石核・彫片
27	西大池遺跡	砥部川右岸	67.0m	斜面	楔形石核・彫片
28	榑石山占領遺跡	右手川左岸	約43.0m	平地 地	AT火山灰
29	上三谷岩崎遺跡	砥部川左岸	36.0m	斜面	ナイフ形石器

樽味四反地遺跡西壁土層図



樽味遺跡北壁土層図



第39図 樽味四反地・樽味遺跡AT検出状況

〔解説〕 始良Tn火山灰(AT火山灰)について

鹿児島湾北部を占める始良カルデラより噴出した始良Tn火山灰(AT)は、噴出年代を¹⁴C資料等により約2.1万~2.2万年前とされている。この降下テフラの分布は、日本列島をごく短時間で広く覆い、町田・新井(1976)によって関東地方から新潟・福島県の東北地方まで、広範囲にその存在が追跡されている。これにより、考古学・土壌学・火山学・年代学研究を確立する上で広域的時間示標層として最重要な鍵層とされ、多方面からその研究がなされている。

近畿・中国・四国地方に於ても、AT火山灰の検出例が報告されており近畿地方では、AT火山灰は約10cm~20cm(町田・新井 1976)程度の厚さがあると推定され、奈良県二上山遺跡・高槻市郡家今城遺跡等からAT火山灰が旧石器文化層中に縦長剥片を中心とした遺物とともに検出されている。

中国地方では、岡山県の野原遺跡早風A地点からAT火山灰が確認され、瀬戸内地方に分布する多くのナイフ形石器と共通するとされる遺物の検出があり、注目されている。

四国地方では、AT火山灰は約40cm~50cm(町田・新井 1978)の厚いテフラ層として堆積したと推定されるが、これまでに遺物と関連した明瞭かつ積極的な報告例は見られない。

近年、これら広域火山灰を層序へ利用される例は多いが、その示標テフラ層が一次的なものなのか二次的なものなのかという判定が重要な課題となっている。

(小笠原善治)

在確認されている樽味・樽味四反地遺跡（宮本 1988・梅木 1989）のA T火山灰等（第39図）の広域火山灰の当地域におけるあり方を詳細に検討し、旧石器時代遺物の出土層位に係わる基礎資料の理解と蓄積が急務と考えられる。

2. 遺物観察

小野川流域の旧石器時代遺物群は、瀬戸内を代表する国府期の遺物を含め瀬戸内技法を逸脱したと考えられるナイフをはじめ小形ナイフ形石器・角錘状石器・有舌尖頭器等の後期旧石器時代遺跡群が、十亀・長井両氏によって精力的に報告されている。こうした資料と一部重複するものであるが、同流域の石器群の中でナイフ形石器の範疇として捉えることが可能な資料を提示し、検討を加えることとしたい。

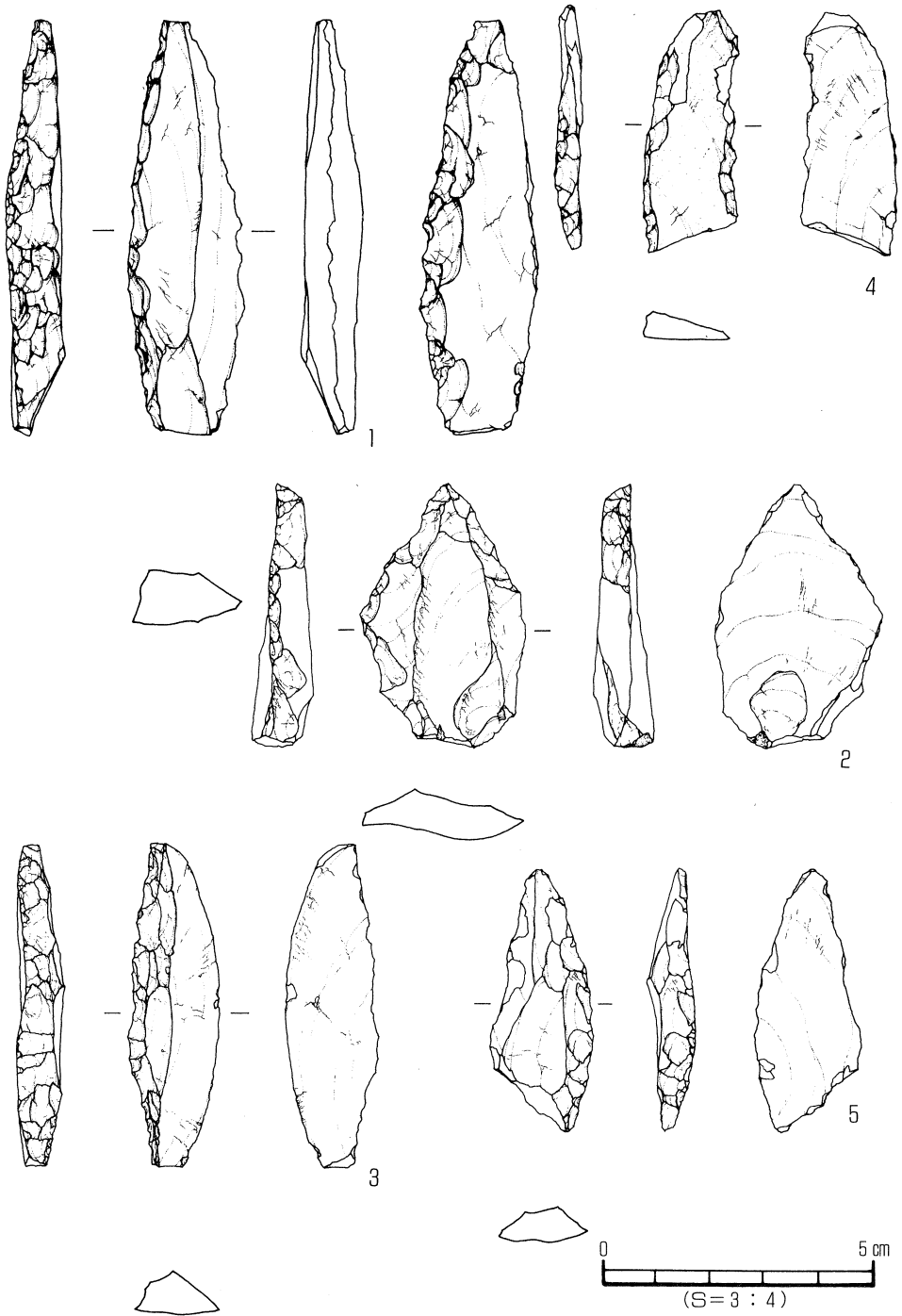
第40図1・2どちらもサヌカイト製資料であり、隣接する調査区より検出された資料である。1は、横長剥片を素材としたナイフ形石器で、右面はポジティブ面で左側にはネガティブ面よりの比較的甘い整形加工痕が見られる。整形調整部位は、左側縁の調整に終始し、一部先端部に意識的な作り出しの加工痕を有する。左面は、素材剥片のネガティブ面2枚を留める。左側側縁は、ポジティブ面からのブランディングが入念に施されている。底面・ネガティブ面・主要剥離面の剥離方向が翼状剥片のそれと合致することから翼状剥片を素材にしているものと認められる。

2は、サヌカイト製の不定形縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面はポジティブ面でポジティブ・バルブが発達しバルバー・スカーが認められる。背面は、右刻調整時のネガティブ面を残し、剥離方向は一定の方向を定めない。剥離調整部は、両側縁に認められ先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、ポジティブ面から比較的粗雑な整形加工が施されている。

3は、サヌカイト製の横長剥片を素材としたナイフ形石器で、右面はポジティブ面で両側部が欠損している。左面は、素材剥片のネガティブ面であり整形加工による剥離面で入念な整形加工が認められる。左側側縁は、ポジティブ面からのブランディングが入念に施されて打面がカットされている。一部基部の作り出しにおいては背面よりの整形加工が見られる。底面・ネガティブ面・主要剥離面の剥離方向が翼状剥片のそれと合致することから翼状剥片を素材にしているものと認められる。

4は、サヌカイト製の横長剥片を素材としたナイフ形石器で、風化が比較的進んでいる。右面は、ポジティブ面で両側部が欠損している。左面は、素材剥片のネガティブ面であり右側縁上端に小さく底部を留める。左側側縁は、ポジティブ面からのブランディングが入念に施されて打面がカットされているネガティブ面・主要剥離面の剥離方向が翼状剥片のそれと合致することから翼状剥片を素材にしているものと認められる。

5は、サヌカイト製の横長剥片を素材としたナイフ形石器で、右面はポジティブ面でポジティブ・バルブが発達しバルバー・スカーが認められ端部が欠損している。左面は、素材剥



第40図 松山平野の旧石器時代遺物(1)

片のネガティブ面であり整形加工による剥離面でポジティブ面剥離方向と同一方向の整形加工が認められる。素材剥片のネガティブ面2枚を留める。右側側縁は、ポジティブ面からのブランディングが施されて打面がカットされている。左側縁に底面を残す。底面・ネガティブ面・主要剥離面が翼状剥片のそれと合致することから翼状剥片を素材にしているものと認められる。

6は、赤色チャート製の不定形横長剥片を素材としたナイフ形石器で、下部欠損状況と観察される。左面の右側縁はポジティブ面からの入念なブランディングが施されて打面がカットされている。背面・主要剥離面の剥離方向が逆転することから翼状剥片のそれとは異なる剥片生産過程を経て採取された剥片素材に整形加工されたナイフ形石器と考えられる。

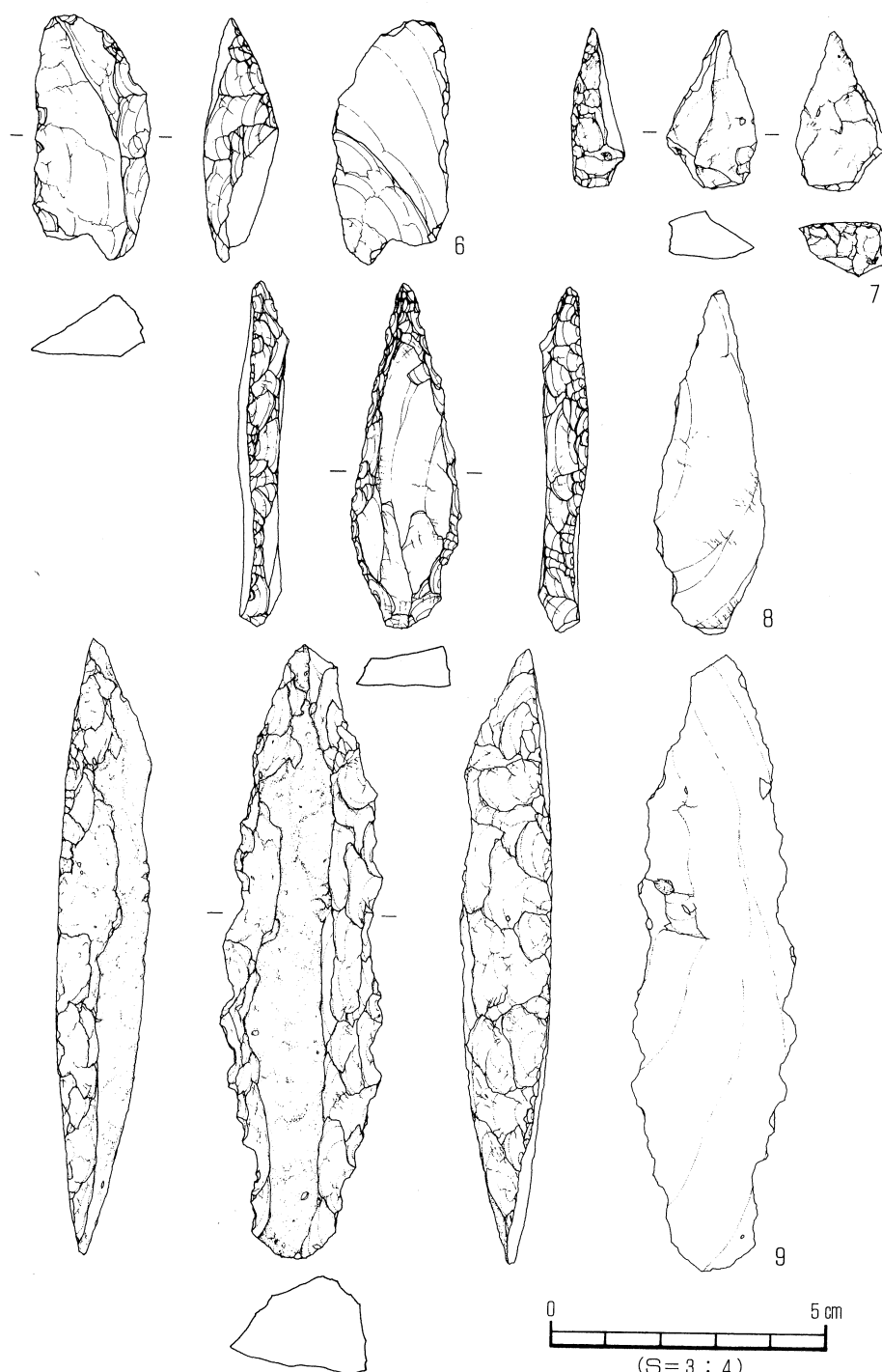
7は、サヌカイト製の不定形横長剥片を素材としたナイフ形石器で、右面は、ポジティブ面でポジティブ・バルブが発達しバルバー・スカーが認められる。左面は、素材剥片のネガティブ面であり左側に石核の底面を留める。左側側縁から基部にかけては、ポジティブ面からのブランディングが入念に施されて打面がカットされ、整形加工により小形ナイフ形石器を呈する。背面ネガティブ面・主要剥離面の剥離方向は、同一であり打点位置の移動が観察される。

8は、ホルンフェルス製の横長剥片を素材としたナイフ形石器である。左面は、素材剥片のネガティブ面であり整形加工による剥離面でポジティブ面剥離方向と同一方向の整形加工が認められる。左側縁下位に底面を残す。両側縁は、ポジティブ面から（先端部は一部陵上剥離）のブランディングが施されて特に先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、断面台形状の角錘状石器（舟底形石器）を呈する。

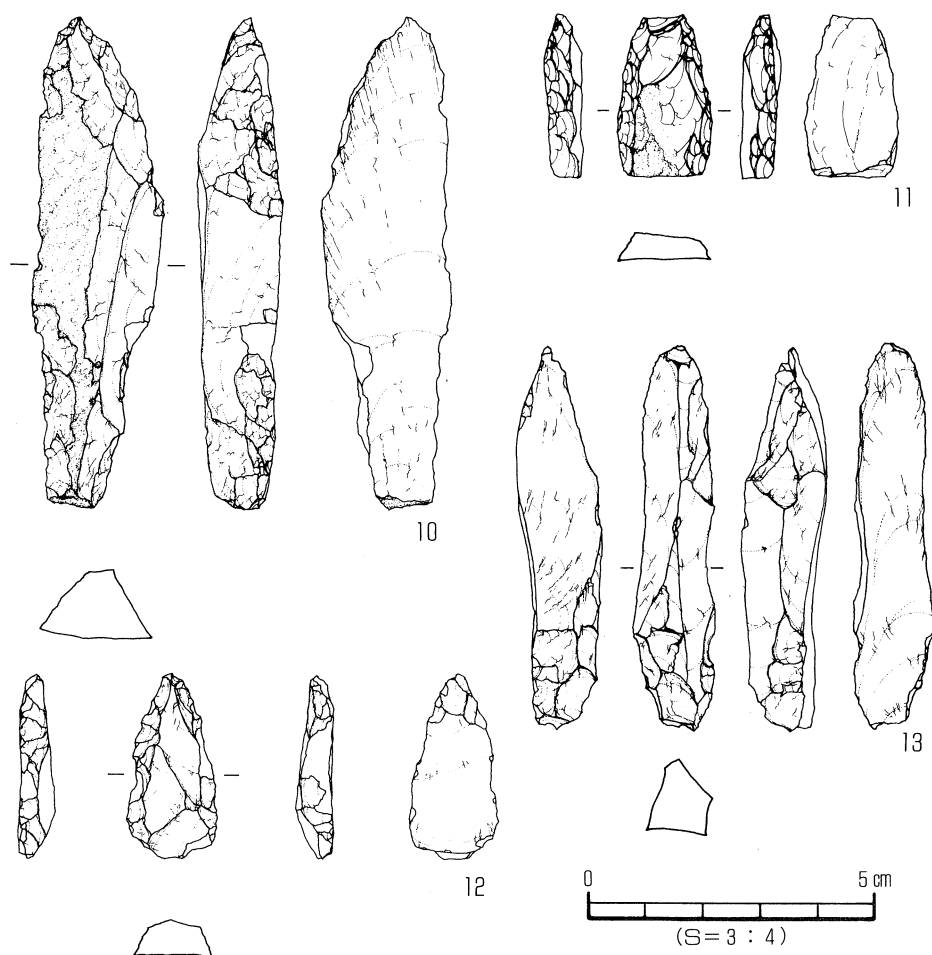
9は、サヌカイト製の礫面を残す大型幅広剥片を素材としたナイフ形石器である。右面は、ポジティブ面でポジティブ・バルブが発達しバルバー・スカーが認められる。意識的に素材剥片の剥離方向に対して垂直（横長）に素材を取りポジティブ面からの角度の比較的粗雑な整形加工が施されて打面がカットされている。背面中央には、礫面を留める。両側縁は、ポジティブ面からのブランディングが施されて断面台形状の大形角錘状石器（舟底形石器）を呈する。

10は、サヌカイト製の礫面を残す不定形縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面は、ポジティブ面でポジティブ・バルブが発達している。背面は、石核調整時のネガティブ面を残し、礫面を留める。整形調整部は、先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、ポジティブ面から比較的粗雑な整形加工が施されて角錘状石器（舟底形石器）を呈する。

11は、赤色チャート製の不定形横長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面はポジティブ面であり整形加工により打面がカットされている。左面は、素材剥片のネガティブ面であり整形調整部は、両側縁に認められポジティブ面から比較の入念な整形加工が施され断面三角形の角錘状石器（舟底形石器）を呈する。



第41図 松山平野の旧石器時代遺物(2)



第42図 松山平野の旧石器時代遺物(3)

12は、サヌカイト製の不定形縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面は、ポジティブ面であり基部の作り出しによる整形加工により打面がカットされている。左面は、素材剥片のネガティブ面であり剥離方向は一定の方向を定めない。整形調整部は、部分的に両側縁に認められ先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、ポジティブ面から比較的粗雑な整形加工が施され断面台形状の角錐状石器（舟底形石器）を呈する。

13は、サヌカイト製の不定形縦長剥片を素材としたナイフ形石器である。右面は、ポジティブ面でポジティブ・バルブが発達している。背面は、素材剥片のネガティブ面を残し先端部と基部に意識的な作り出しの加工痕を有し、ポジティブ面から比較的粗雑な整形加工が施されて角錐状石器（舟底形石器）を呈する。

以上、現在までに検出された流域の一部ナイフ形石器の観察を行った。これらの遺物群の特長として次の点に留意することができる。近畿・西瀬戸地方のサヌカイト原産地を中心として西日本一帯に検出される瀬戸内技法を主体とした国府期のナイフ形石器文化の直接的影響を受けた資料として翼状剥片素材の国府型ナイフ形石器第40図1・3・4・5、さらに石材・素材剥片の違いは認められるものの比較的国府文化期の剥片剥離技術の影響を受け横長剥片素材に規制されたと認められる第41図6、石材・素材剥片の違いは認められるものの小形ナイフ形石器として第41図7・第42図11・12、尖頭器的機能を有すると考えられる角錐状石器として第41図9・第42図10・13、剥片尖頭器の様相を持ち先端部と基部に意識的な整形加工が施された第40図2など、近畿・西瀬戸地域にみられる後期旧石器文化のナイフ形石器の形式変化に大きくは、差異が認められない。しかしながら、一般的な後期旧石器時代の瀬戸内的様相を呈するものの今後、石器組成や剥片剥離技術において十分な検討を要している。

まとめ

小野川流域に見られるナイフ形石器の一部資料を概観すると多彩な剥片剥離技術の存在を考慮することができ、従来言われている国府期の瀬戸内技法関連資料が主体を占めるとされた概念は捨てざるをえない。また、形態的にもバリエーションを持つことからかなりの時間差を前提とした資料操作の必要性を持つものと考えられる。調査時におけるこれらのナイフ形石器に伴う石核・剥片類の資料的価値認識の重要性とともに構造的理解の不足からユニット・ブロック認識がなされないままで放置されている石器群の位置づけがなされはじめて流域の旧石器時代様相の研究・解明が緒につくものと期待される。

また、サヌカイト原産地から遠く離れた当地域においての特長として石核・剥片の検出量が激減する状況にあり、在地の石材選択に際し石器製作に係る何らかの集団間の規制を考慮することもでき本地域の旧石器文化様相は、石材消費地として瀬戸内の旧石器文化研究の重要な位置を占めているものと考えられる。

現在のところ、こうしたナイフ形石器以外にも楔形石器と呼ばれる石器群の存在が解明されつつあり、共伴する土器を持たないことから旧石器の様相を持つものとして取り扱われている。現段階においてまだ石器群の詳細な状況を把握するには至っていないが、パイプラー・テクニックによる剥片剥離技術の存在は、確実に当地域の中で継続し縄文前期の段階まで山間部において継承されている。さらに、有舌尖頭器も平野部において検出されつつあり今後、微高地・低位段丘・埋没丘陵を含めた海拔約30M～50M平坦地位置において有舌尖頭器を石器組成とするユニット群の検出も近いものと考えられる。

小野川流域の旧石器文化と題して、筆者の不勉強から流域のナイフ形石器の資料紹介に終始し流域の旧石器時代に十分な検討を与えることができなかった事をお詫び申し上げますとともに資料提供にあたり梅木・山之内両氏に十分にご配慮頂きお礼申し上げます。また、特に小笠原氏には、作図・資料検討・執筆に渡り労を煩わし、深く謝意を表します。

〔参考文献〕

- 木崎 康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究 ―その編年と展開―」『旧石器考古学』37 旧石器文化談話会 PP.25-43
- 松藤 和人・柳田 俊雄・佐藤 良二・久保 弘幸・中川 和哉
1989 「座談会：近畿・瀬戸内地方における旧石器編年研究の回顧と展望」『旧石器考古学』〈特集ナイフ形石器文化終末期の石器群〉38 旧石器文化談話会 PP.3-18
- 柴田喜太郎 1989 「大阪府八尾南遺跡の堆積物の検討」『旧石器考古学』〈特集ナイフ形石器文化終末期の石器群〉38 旧石器文化談話会 PP.58-60
- 森本 晋・岡本 勝行・清水 和明
1989 「長原遺跡88-4次調査地出土の旧石器」『旧石器考古学』〈特集ナイフ形石器文化終末期の石器群〉38
- 松藤 和人 1974 「国府型ナイフ形石器をめぐる諸問題」『プレリュード』19 旧石器文化談話会 PP.35-49
- 奈良県立橿原考古学研究所編
1984 「二上山北麓石器製作遺跡の調査 ―清風荘第3地点遺跡・滝ヶ谷遺跡―」『奈良県文化財報告書』第42集
- （財）広島県埋蔵文化財調査センター
1989 「冠遺跡群〈D地点の調査〉」『広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書』第80集
- 加藤 晋平 1990 「東アジアの旧石器文化」『東アジアと日本〈特別考古学講座講演集〉』市制百周年記念 福岡市埋蔵文化財センター PP.4-21
- 萩原 博文 1978 「ナイフ形石器 ―統計処理による機能の推定―」『中山遺跡の研究(1) 〈遺物篇1〉』平戸市教育委員会 PP.1-26
- 大分県教育委員会
1982 「津留遺跡発掘調査概報 ―国道326号改良工事に伴う発掘調査―」
- 広島大学統合移転地理埋蔵文化財調査委員会
1990 「広島大学統合移転地理埋蔵文化財発掘調査年報Ⅷ」
- 絹川 一徳 1989 「徳島県土柱周辺の旧石器」『旧石器考古学』39 旧石器文化談話会 PP.55-63
- 飯島 正明 1989 「大阪府箕面市宮ノ原遺跡採集の角錘状石器」『旧石器考古学』39 旧石器文化談話会 PP.63-66
- 有本 雅己・有本 昭子
1989 「鶴峯荘第2地点東の新資料」『旧石器考古学』39 旧石器文化談話会 PP.75-76
- 吉村 公男・深瀬 早人・佐藤 良二
1989 「馬見丘陵におけるナイフ形石器の一例 ―奈良県河合町フジ山古墳付近採集―」『旧石器考古学』39 旧石器文化談話会 PP.77-76
- 八木 浩司 1987 「西八木層中の火山灰の起源」『国立歴史民俗博物館研究報告〈明石市西八木海岸の発掘調査〉』第13集 国立歴史民俗博物館 PP.95-102
- 八木 浩司 1987 「明石海岸の地形学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告〈明石市西八木海岸の発掘調査〉』第13集 国立歴史民俗博物館 PP.103-115
- 松藤 和人 1987 「西日本におけるA T以下の石器群」『国立歴史民俗博物館研究報告〈明石市西八木海岸の発掘調査〉』第13集 国立歴史民俗博物館 PP.205-232
- 岡村 道雄 1987 「日本前期旧石器研究の到達点」『国立歴史民俗博物館研究報告〈明石市西八木海岸の発掘調査〉』第13集 国立歴史民俗博物館
- 十亀 幸雄
「愛媛県祝谷丸山遺跡の細石刃剥離技術」『古代学研究』第88号 PP.1-10
- 橋 昌信 1978 「大野川中流域における旧石器時代研究の基礎調査(1) ―今峠遺跡―」『別府大学博物館報告No.2』 PP.15-22
- 井関弘太郎 1988 「沖積層・沖積平野の形成環境（総括）」『日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究』 PP.1-5
- 大森 博雄 1988 「日本島河川の縦断面曲線の関数形と沖積平野の類型との関係」『日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究』 PP.6-15
- 斉藤 亨治 1988 「第四紀末期における日本の扇状地礫層の堆積期」『日本における沖積平野・沖積層の形成と第四紀末期の自然環境とのかかわりに関する研究』